

88. 災害時に支援のミスマッチを解消するための調査研究

日本福祉大学 社会福祉学部 講師 菊池 遼

概要

災害時には被災自治体の行政・社会福祉協議会は、通常業務に加えて災害対応に追われ、外部支援の受入対応にも苦慮している。東日本大震災以降、全国各地から NPO/NGO、ボランティア、専門職を派遣するシステムが次々に生まれたが、それらの支援を受け入れる被災地自治体では混乱する状況が繰り返し発生している。

このような支援のミスマッチが発生しているなか、本研究では即興的に効果的な福祉支援体制を築くため、「災害ジェネラリスト」なる人材が必要ではないかと考えた。この「災害ジェネラリスト」とは、災害対応の知識・技術・価値観を備え、被災者が有する課題に応じて支援活動をコーディネートできる人材であると仮定している。

「災害ジェネラリスト」のコンピテンシーを探索するため、被災地で災害支援を行なってきた NPO/NGO や社会福祉協議会に所属している人物を対象に、スノーボウル・サンプリングを採用してインタビュー調査を実施した。インタビューで得られたデータについて定性的コーディングを行い、コンピテンシーの概念化した。この導出されたコンピテンシーについてアンケートを行い、被災者支援に携わる人々の関心について調査した。さらに、被災者支援に詳しい専門家との協議により、研修用テキストの構想を練った。

背景および目的

災害時には被災自治体の行政および社会福祉協議会は、通常業務に加えて災害対応に追われるため苛烈を極め、外部支援の受入対応にも苦慮している。東日本大震災以降、全国各地から NPO/NGO、ボランティア、専門職を派遣するシステムが次々に生まれたが、それらの支援を受け入れる被災地自治体では混乱する状況が繰り返し発生している。全国で災害対応の経験が蓄積されることで、災害対応の知識・技術が共有されることが望ましいものの、そのノウハウは災害支援を専門としている者の暗黙知になっている。被災地の現場では、同じく災害支援をする者同士が顔を合わせる機会は多く、互いが持つ専門性を超えたネットワークは築かれているものの、基盤となる災害支援の価値観については言語化できていない状況にある。それが所以して近年の災害現場でもまた少なからず衝突や混乱が起こっているのである。

このような支援のミスマッチが発生しているなかで、本研究では即興的に効果的な福祉支援体制を築くため、「災害ジェネラリスト」なる人材が必要ではないかと考えた。この「災害ジェネラリスト」とは、災害対応の知識・技術・価値観を備え、被災者が有する課題に応じて支援活動を展開できる人材であると仮定している。現在でも被災地で活躍している「災害ジェネラリスト」と思しき人材を対象にインタビュー調査を行い、彼／彼女らが持つコンピテンシーが何かを明らかにする。

このコンピテンシーを明らかにすることにより、1つ目に現在災害現場で活動している人たちが持つ知識・技術・価値観とは何かを言語化することによって、共通の基盤を明らかにすることにより、災害現場での協働における混乱を少なくしたい。2つ目に上記で明らかにしたことをもとに人材育成の研修テキストを作成し、「災害ジェネラリスト」を育成したい。研修を経た人材が災害現場で活躍することにより、支援のミスマッチが解消され、業務過多になる被災地自治体の行政および社会福祉協議会の状況が改善されることを目的としている。

これまでの成果

小規模自治体における災害対応体制および支援団体・機関との連携

被災自治体での支援のミスマッチによる混乱や課題を明らかにするため、令和元年東日本台風で被災した宮城県丸森町を対象に、行政、社会福祉協議会、NPO が参加したフォーカス・グループ・インタビューを実施した。その結果、行政内では地域資源およびネットワークに精通する中堅職員に業務が集中していたことが明らかとなり、外部支援を受け入れる災害ボランティアセンターなどでは社会福祉協議会や NPO が活躍していたことが分かった。地域で外部支援を効果的に受け入れるためには、資源をつなぐために地域とのネットワークを持っている人材が必要不可欠であると結論づけた。地域の情報をよく知り、人的ネットワークがあることが支援を受け入れる自治体の「ジェネラリスト」に必要な要素であることが示唆された。

復興期の災害ソーシャルワークの役割・機能

東日本大震災以降には、災害ソーシャルワークの理論化および体系化が進められたが、その対象は主に発災直後の避難所期までのフェーズを中心とした研究蓄積が多かった。被災者の生活再建には中長期的な関わりが必要となるため、復興期の災害ソーシャルワークの役割・機能を検討することにした（菊池 2022）。復興期の災害ソーシャルワークでは、被災者が時間の経過とともに要援護者になる可能性があることにも注意し、被災者の抱える生活再建のニーズに中長期的に寄り添う役割がある。さらに、平常時のソーシャルワーク技法を活かしながら災害支援に関する知識・技術を身につけて解決に導く機能がある（菊池 2022）。災害支援に関する知識・技術として、公的支援制度などを活用した住まいの問題の解決などが含まれ、さらに度重なるリロケーションがあった地域においては災害公営住宅団地などでコミュニティを一から形成する援助を行う場合がある。このように、通常時のソーシャルワークでは対応できない被災者の課題解決について必要な知識・技術が存在するため、それらが何であるかを明らかにすることが求められる。

災害ジェネラリストのフレームワーク

「災害ジェネラリスト」のフレームワークを構築するため、ソーシャルワークにおけるジェネラリスト・アプローチに着目した。「ジェネラリストは、クライアントを社会環境との関わりの中で捉え、彼らが置かれた状況というコンテキストとあわせて問題を考え、個人的・環境的構造の両面において解決策を追求する。」（DuBois & Miley 2013=2017:260）ジェネラリスト・アプローチを災害時に置き換えれば、災害発生から時間経過とともに被災者がどのような環境に置かれるのかを体系化し、とくに環境的構造の中でどのような問題が発生しやすいかを予め想定しておくことができるようになることだろう。災害時の状況を踏まえて、ミクロ・メゾ・マクロの俯瞰的な視点から被災者支援を展開できる人材が「災害ジェネラリスト」となるだろうと想定することができた。

災害時のジェネラリスト・ソーシャルワーク

災害時のジェネラリスト・ソーシャルワークについて考察を深めるため、佐賀県武雄市の事例について調査した。武雄市は、「令和元年 8 月 27 日からの大雨」（以下、令和元年の大雨）と「令和 3 年 8 月 11 日からの大雨」（以下、令和 3 年の大雨）によって、短い期間のうちに二度の被災を受けた地域である。そこで活躍しているのが、民間団体である一般社団法人おもやい（以下、おもやい）である。

おもやいは、令和元年の大雨の発生後に設立された佐賀県武雄市の団体であり、民間のボランティアセンターを設立・運営していた。武雄市社会福祉協議会に設置された災害ボランティアセンターで受け止めきれなかったニーズや専門的技術を有するボランティアの受け入れを行っていた。近年の水害被災地では、被害を受けた住宅を修繕するのに、床下の泥出しや乾燥などの対応が必要であるという認識が広まっている。これらは一般のボランティアでは対応しきれない場合が多く、専門的な技術を持つボランティアが必要とされている。そこで、おもやいのボランティアセンターはそのような住宅の再建に関する専門的なニーズにも対応していたのである。

令和元年の大雨では、日本各地から災害支援を専門とする NPO/NGO がおもやいのボランティアセンターに駆けつけた。それらの団体はおもやいに災害支援のノウハウを伝授しつつ、水害で被害を受けた住宅に入ってボランティア活動を展開していた。さらに、令和 3 年の大雨の際には、佐賀県内外から看護師のボランティアチームを受け入れ、健康状態や心理的状态が心配される被災者宅に訪問活動を行った。これらの一連のボランティア活動がフェーズフリーの支援につながっており、現在おもやいは災害ボランティアの過程で発見された生活困窮世帯の支援や、防災の活動など平常時の活動へと展開している。

近年の被災地では在宅被災者が問題になっており、支援が届きにくいという課題がある。被災者の中には自らの力で助けを求めることが困難である人もおり、いかにアウトリーチするかが全国各地の被災地で課題になっているのである。おもやいはそのような潜在的にニーズを持つ人たちにいかにつながれるかということを意識し、他にも物資配布や炊き出しなど支援活動は多岐に渡る。つまり、おもやいが特徴的な点は、被災者のニーズに寄り添うために、様々な支援の引き出しを用意していることにある。

このおもやいの事例から示唆されるのは、災害時のジェネラリスト・ソーシャルワークでは従来のソーシャルワークの枠組をも超えた役割・機能を持つべきであるということである。水害で被災を受けた地域の人々のもっぱらの課題は住宅の再建であり、このようなニーズに寄り添うことで被災者との信頼関係も築きやすくなる。支援の入り口として住宅の再建に関する活動を行い、ボランティアが被災者と接するうちにその人が抱えるその他のニーズが発見された場合がある。おもやいは、このような人々のニーズを見逃さずに、次の段階の生活再建ないし生活支援に向けた取り組みへとフェーズフリーの伴走型支援を展開しているのである。

したがって、災害時のジェネラリスト・ソーシャルワークでは、被災者のニーズに手が届くように様々な支援のメニューを持つことが重要である。水害によって被災を受けた人々が抱えるニーズの多くは住宅の再建であるが、そもそもソーシャルワークではそのような知識・技術は有していない。災害時には平常時には連携する機会の少ない建築関係の専門職などともつながり、支援者が最低限の知識・技術を有して被災者のニーズを汲み取る必要がある。住宅の再建に係る活動から被災者に介入し、アセスメントとモニタリング繰り返すことが災害時のジェネラリスト・ソーシャルワークには求められる。介入の中で新たに見つかったニーズがあれば、平常時の支援までも視野に入れて対応するという、幅の広い支援の展開が求められているのである。

災害ジェネラリストの対人支援コンピテンシーの探索と調査

災害対応人材のコンピテンシーを明らかにするため、先行研究の整理を行った。看護職など医療関係者の分野では災害対応のコンピテンシーを明らかにする研究が進められている（Gallardo et al. 2015）ものの、ソーシャルワークを対象にした研究蓄積は僅少である。コンピテンシーを明らかにするための手法として、先行研究の分析（Gallardo et al. 2015）やインタビュー調査及びアンケートの自由記述に基づく調査（Wart & Kapucu 2011）、デルファイ法や因子分析を用いた調査（Wisittigars & Siengthai 2019）があることを確認し、これらを参考にした調査フレームワークを設計することにした。

本研究では、現時点では「災害ジェネラリスト」のコンピテンシーについて明らかにするため、災害ジェネラリストの資質を備えている人物に対し、インタビュー調査を実施した。対象者はこれまでに被災地で災害支援を行ってきたNPO/NGOや社会福祉協議会に所属している人物であり、スノーボウル・サンプリングを採用して対象者に調査を依頼した。インタビューでは、外部者および被災地域における支援者が備えるべき知識・技術・価値観について、インタビューガイドに沿って聞き取りを行った。インタビューはオンライン面接ツール（Zoom）を用いて、録画・録音、データを文字起こし業者に発注し、逐語録を作成した。この逐語録をもとに、佐藤（2008）を参考に、定性的コーディングを行なった。2022年7月から調査を開始し、2023年7月まで23名にインタビュー調査をすることができた。

インタビュー結果を分析したところ、表1から表3のように被災者支援に求められる価値・知識・技術は6つのコアカテゴリ、35のサブカテゴリ、180のコードが生成された。また表4のように地域の支援者に求められる価値・知識・技術は、3つのカテゴリ、14のコードが生成された。

表 1. 被災者支援に求められる価値・知識・技術

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
一つ一つの要素を繋げる俯瞰的視野と復興を意識した戦略を持つ	被災地をアセスメントしながら災害復旧の戦略を持つ	地域アセスメントで支援の見通しを立てる
		物事が進むための戦略を持つ
		地域の条件によってやり方を変える ときにはしたたかに動く
	時間軸・空間軸・主体軸を掛け合わせた視点を持つ	支援の全体の流れを意識する
		トータルの支援の体制の構築を考える
		ミクロ・メゾ・マクロの連動性を意識する 圏域ごとのニーズを意識して支援を調整する 支援の漏れ・ムラがないようにする
	支援における優先順位をつくる基準を持つ	被災者優先であることを意識する
		民間支援は平等ではなく公平を意識する
		災害ボランティアセンター閉所以降を見据える
		災害ボランティアセンター得た情報を次の支援に生かす 支え合いセンターを見据えて動く 住まいや暮らしの再建を見据える 外部支援が去ったあとの支援主体を考えておく
内省的省察をしつつ柔軟にスタンスを変えていく	被災地の状況によって自分のスタンスを変える	災害は日常の延長線上に起きている 地域福祉で考えれば始まりも終わりもない 地域を基盤としたソーシャルワークを展開する 災害から平時の地域づくりに向けて動く 伴走型支援の体制を考える
		自分自身のキャラクターを認識する 足りないリソースに合わせて自分の立ち位置を変える 地域の条件に合わせて想定を柔軟に変えていく 相手の良いアイデアを採用する ぐいぐい引っ張るよりも調整できる人が活躍する
		短期的な正解と長期的な最適解は異なる すべてが効率・スピード優先ではない マニュアルがミスリードしてしまうことがある 制度の枠組みに囚われすぎない 制度の不備やリソースの不足に目を向ける 制度化によって切り捨てられる可能性を考える 一人の人に入り込みすぎてもいけない
	支援が本当に正しいか常に検証する	過去の経験・知識がかえって邪魔をすることがある 自分の考えが歪んでいないかを疑う 救えない人がいることに悔しさを抱く
	過去の経験を反省して向き合う	

表 2. 被災者支援に求められる価値・知識・技術（続）

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
多様な主体を巻き込みながら相互理解をしつつ協働をコーディネートする	支援活動をクリエイティブにするために多様な主体を巻き込む力を持つ	様々な主体が関わることで新たなことを生み出す 支援活動にバリエーションを増やして創造的にする ボランティアが持つ強み最大限に生かす 人によって伝え方を変える翻訳力を持つ どの順番で話を通すのがよいかを考える ときにはぶつかり合ってエネルギーを大きくする
	協働相手の技術・特性を把握する	各主体によって関心ごとが違うことを理解する 業界ごとに響く言葉が違うことを意識する 専門職や土業の技術・特性を知っておく 専門職だからこそ視野が狭まることもある 相手と対話をしてから信頼できるか判断する
行政・社協・NPOの適切な三者連携・協働を図ることができる	行政・社協・NPOの適切な三者連携・協働を図ることができる	行政が縦割りであることに気を遣う 行政の限界について知っておく 市町村・都道府県・国の関係性に配慮する 行政や社協の苦しさを理解する 災害支援のメニューが増えすぎて大変なことを理解する 担当者がよくても組織が動かない場合がある 属人性によってできる／できないことがあることへの理解する NPOが持つ情報と行政・社協が持つ情報を交換する 行政や社協ができないことをNPOがカバーする
	目的を定めて効率的な会議の場をつくる	目線合わせをして支援のベクトルを定める ファシリテーションを意識する 会議のデザインをしっかりとる 情報共有会議がケース会議にならないように気を付ける ボランティアの話題に時間が割かれすぎないようにする 会議の時間効率を調整する ときには会議体を整理する
被災地域の支援者に配慮しながら伴走型でいく	情報を収集・整理してコミュニケーションを取る	データで見える化する ICTを使いながら仕事を効率化していく 多様なコミュニケーションツールを使う 相手によってコミュニケーションツールを使い分ける 地図などアナログな手法も生かす
	被災地域の支援者に配慮しながら伴走型でいく	支援者同士の上下関係をつくらない 地域の支援者と誤行錯誤で伴走する 地域の支援者が被災者である側面を忘れない 協働相手の言語／非言語情報からサインを読み取る 小さな積み重ねが相手の価値に影響を与える
被災地のニーズに合わせた支援を提案する	被災地のニーズに合わせた支援を提案する	現場からの声をあげていく 具体的な支援メニューの選択肢をいくつか用意する 過去の経験から良いアイデアの事例から持っておく 提案のメリット・デメリットを示す 理想的な支援と現実的なラインを見極める 専門職とサポートするネットワークを構築する 提案地獄を避ける
	信頼を勝ち取る力を持つ	外部支援者が地元の支援者と短時間で信頼を築く 地元の支援者に力量を測られていることを意識する 初めて関わる人には丁寧に粘り強く説明する 支援者同士で汗をかくて信頼をつくる 困ったときに相談してもらえ関係性をつくる
地元が活躍できる災害ボランティアセンターをつくる	地元が活躍できる災害ボランティアセンターをつくる	災害ボランティアセンターはオーダーメイドでやる 地元の社協がなるべく地域に出られるようにする 地元の負担を軽減して動きやすくする 地元の人に土地勘や人脈を紹介してもらう 楽なほうに流されず支援世帯を減らすことに抗う 地元の視点ばかりだと支援の漏れが発生する
	資源のネットワークを形成してマッチングする	相手が欲しい資源を持っておく ネットワークから必要な資源を探してマッチングする ロジスティックの調整能力がある 人の動きの調整ができる。 適切な場所に適切な支援者を入れる 資金獲得のノウハウがある 情報発信から新たな資源を獲得する ニーズとシーズの主従関係が逆にならないようにする
災害対応と同時に人材育成をしつつノウハウを地域に落とす	災害対応と同時に人材育成をしつつノウハウを地域に落とす	災害対応をしながらOJTで人を育てる キーパーソンを探して災害支援のノウハウを伝えていく 必要な勉強会・研修会を企画する リフレクションとフィードバックを繰り返す

表3. 被災者支援に求められる価値・知識・技術（続々）

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
被災者一人ひとりの課題に寄り添ってエンパワメントする	被災者の気持ちを汲む丁寧な傾聴を心がける	一人ひとりが大切にしている思いを尊重する その家・土地に住み続けたい思いを汲む 気持ちを吐き出させて受け止める 住民が行政に怒りをぶつける気持ちを理解する 行動や発言の裏側を読み解いて支援する 雑談も傾聴のうちと受け止める
		弱い立場の人が取り残されることに眼を向ける パワーレスな部分な部分に目を向ける 被災者の声を代弁する 在宅被災者に関心を向ける 支援を拒否する人を継続的に見ていく 何回も足を運ぶことで信頼関係をつくる 待つだけでは上がってこない声があることを意識する 最後の1人までを意識する 被災者と関わる接点を多く持つ
	被災者が前を向けるようにエンパワメントする	被災者のありたい姿になれるようにする 被災した人たちのやりたいことをサポートする 人を動かすためのスイッチを持つておく 被災者が持っているパワーを信じる 前を向けるまで背中を押す
		生活再建の情報を知らないことで損がないようにする 専門職や士業と相談会を開催してマッチングする 難しい情報を翻訳して届ける
	課題解決をしながら支援対象者の信頼を得る	家の困りごとからとっかかりをつくる 被災者に頼ってもらえるようにする 困った人に対してノーと言わない 個人で解決できない問題を専門職や支援機関がサポートする 専門職の関わりがきっかけでプレッシャーになることもある
		まちを綺麗にするだけで終わらない 支援機関や専門職につなぐだけで終わらない 困難世帯の支援の継続を考える 最後の1人は厳密には存在しない なるべく長く支援の行く末を見届ける
	地域の文脈・特徴を踏まえて地域に合った支援を展開する	地域の資源やつながりを生かす 地域に眠っている潜在的な力を引き出す 地元の人たちの考えを尊重する 地域の助け合いの文化を尊重する ボトムアップの地域の意思決定や合意形成を大事にする 地域のキーパーソンを巻き込む 住民組織や民生委員を巻き込んでいく
		地域の歴史的な文脈を踏まえる 地域の特徴や文化・風土に気付く
	地域圏域ごとのニーズ意識してマッチングをする	圏域ごとに足りない資源を外から取り入れる 困りごとをワンストップで受け止める場を設ける 状況に応じてサテライトを置いて地域の情報を収集する
		地域で話し合いながら迷いながら活動を進めていく 地域に人が残る見通しをつける 地域での支え合いや助け合いをつくる 地域の拠点や場をつくる フォーマル/インフォーマルなサポート構築する 外部支援を入れて地域の持続可能性につなげる
災害支援や対人援助に関する知識や技術を広く浅く知る	地域によって受援力が異なることを認識する	地元だけでは主体的に動けない地域もある 地元ができるラインを判断する 社協のやる気によってボラセンが左右されることがある 地元の人たちのベースがあることを考える
		支援者の思いが被災地と一致しないことがある 地元がついてこれなくなることがある 地域の対立関係の片棒をかつがない 地域内での対立に配慮しつつ対話の場をつくる
	外部支援者が地域を掻き乱さない	スーパーマンを作る必要はない 専門家につなぐだけの最低限の知識を持つ 一つの専門性を備えておく ネットワークを軽く積極的に動く 災害前から支援者同士の顔の見える関係をつくる 被災地の登場人物を知る 災害支援キーワードを知っておく
		災害救助法について知っておく 政策のトレンドや変更点を知っておく 制度の運用方法を知っておく 制度の資金的裏付けを把握しておく
	家の再建に関する知識に触れておく	家の修繕方法の概略を知っておく 家の基本的な知識を知っていて損はない
		ソーシャルワークの技法は平時の延長線上で構わない 被災者の権利に眼を向ける 被災者・支援者というパターンリズムにならないようにする 支援の押し付けにならないようにする 共存にならないようにする 支援が対象者のパワーを奪う可能性がある

表 4. 地域の支援者に求められる価値・知識・技術

カテゴリ	コード
地域で動ける人を コーディネートして おく	普段の訓練から住民を巻き込む 地元のキーパーソンを知っておく 地域のコーディネーターを育成しておく 地域の専門職や士業とつながっておく 地域のNPOの情報を知っておく 地域のことについて詳しく知っておく 平時からの地域づくりをしておく 災害前から多様な人が話し合える場を持つようにする
助けて欲しいことを 表明できる	意思決定を地元主体で表明できる 復興後のビジョンを示してもらう 足りない資源を受け入れる 行政が音を上げてくれたほうがやりやすい
知識・技術はないな らないでいい	災害支援のすべては覚えきれない 行政が災害支援制度の大枠を知っておく

災害時に必要な産業保健専門職のコンピテンシーを研究した吉川他(2021)、Yokogawa et al.(2021)を参考に、定性的コーディングで得られた結果をもとにして作成したアンケート調査から定量的な分析を行なった。上記の研究により導出された180のコードについて、被災者支援に携わる人たちを対象にアンケートを行った。0-10までの11段階評価によるリッカード尺度により、それぞれの被災者支援に関わるそれぞれの人の属性によってどのコンピテンシーを重視しているかを明らかにすることを目的とした。当初は、200のサンプル数を集める予定であったが、ウェブ調査において不正回答者が現れた結果、それを除外したところ73のサンプルしか集めることができなかった。このデータについて、分析の途中である。

実践的な災害ソーシャルワークテキスト作成に向けた専門家による助言

本研究助成を得た知見を活かしながら、日本福祉大学社会福祉学部で開講している「災害ソーシャルワーク」の講義を展開した。この講義を録画した内容について、一般社団法人 Wellbe Design の篠原辰二氏にすべての回を視聴していただき、テキスト作成に向けた助言を得た。

この助言を得て、テキスト作成に向けた基本コンセプトが固まった。具体的には、被災者支援の最前線の動きを捉え、災害関連法制の意図を汲み取りながら、実践的な災害ソーシャルワークの役割と機能を体系的に学ぶ内容とすることにした。その主な構成内容は以下のようにまとめることを想定している。

① 人と環境の相互作用に着目したソーシャルワークの役割

災害時に被災者が置かれる環境に着目し、人と環境の相互作用にはたらきかける災害ソーシャルワークの役割・機能を学ぶ。とりわけ、災害時において守られるべき人権とは何かという問いを軸に据え、支援の根拠と方向性を探る。

② マクロ的視点に立つ多職種・多機関連携

ソーシャルワーク（福祉）は、保健・医療専門職などと連携して災害関連死を防ぐとともに、復興期にはあらゆる機関と連携しながら被災者の生活再建に伴走する役割を担う。本科目では、多職種・多機関を巻き込んだマクロ的視点に立つソーシャルワークの展開を学ぶ。

③ 災害関連法制とソーシャルワーク援助技術の接続

近年の災害関連法制が持つコンセプトへの理解を深め、ソーシャルワークの援助技術と結びつけながら、制度・政策を実践に活かす力を養う。

④ 平常時の地域づくりと災害に強いコミュニティの形成

災害対策は、平常時の地域づくりと不可分であるという視点を持ち、日常的なコミュニティ形成の営みが災害への備えにもつながることを意識しながら、レジリエントな地域社会を築く方法や復興期の資源開発について学ぶ。

今後の展望および課題

本調査において定性的・定量的なアプローチの両方の調査を進めることができたことは成果であると考えている。一方で、アンケート調査について今後は報告書を作成し、学術的な分析を進めていきたい。これらの知見を踏まえてテキストとしてまとめ、最終的には商業出版を目指したい。

(完)

発表論文

- 1) 菊池遼 (2022) 「復興期の災害ソーシャルワークの役割・機能について検討する」『日本福祉大学社会福祉論集』第 146 号, pp.37-58.
- 2) 菊池遼 (2024a) 「令和 6 年能登半島地震がソーシャルワークにつきつけた課題—災害ソーシャルワークの行く末の考察と提言」『復興』 pp.17-26.
- 3) 菊池遼 (2024b) 「被災者支援コンピテンシーの探索—NPO・社会福祉協議会のメンバーを対象とした質的データ分析から—」『日本災害復興学会論文集』No.24, pp.44-55.
- 4) 菊池遼 (2025a) 「被災者支援におけるジェネラリスト・ソーシャルワーカー被災者の置かれた環境・ニーズと支援展開、支援主体に着目して—」『日本福祉大学社会福祉論集』第 152 号, pp.17-41.
- 5) 菊池遼 (2025b) 「災害時の総合的かつ包括的な支援体制に向けた理論的考察—先行研究レビューに基づく災害福祉と地域福祉の連動性の検討より—」『日本福祉大学社会福祉論集』第 152 号, pp.97-123.

引用文献

- 1) DuBois, Brenda L. & Miley, Karla Krogsrud. (2013) Social Work: An Empowering, Pearson. (ブレンダ＝デュボワ・カーラ＝K＝マイリー, 北島英直 [監訳], 上田洋介 [訳] (2017) 『ソーシャルワーク：人々をエンパワメントする専門職』明石書店.)
- 2) Gallardo, Alba Ripoll.; Djalali, Ahmadreza.; Foletti, Marco.; Ragazzoni, Luca.; Corte, Francesco Della.; Lupescu, Olivera.; Arculeo, Chris.; Arnim, Gotz von.; Friedl, Tom.; Ashkenazi, Michael.; Fisher, Philipp.; Hreckovski, Boris.; Khorram-Manesh, Amir.; Komadina, Radko.; Lechner, Konstanze.; Stal, Marc.; Patru, Cristina.; Burkle, Frederick M. and Ingrassia, Pier Luigi. (2015) Core Competencies in Disaster Management and Humanitarian Assistance: A Systematic Review, Disaster Medicine and Public Health Preparedness, Vol.9, No.4, pp.430-439.
- 3) 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社.
- 4) Wart, Montgomery Van. & Kapucu, Naim. (2011) Crisis Management Competencies, Public Management Review, Vol.13, No.4 pp.489-511.
- 5) Wisittigars, Boonkiat. & Siengthai, Sununta. (2019) Crisis leadership competencies: the facility management sector in Thailand, Facilities, Vol.37, No.13/14, pp.881-896.
- 6) Yokogawa, Tomoko., Yoshikawa, Etsuko., Abe, Hitomi., Tateishi, Seiichiro. & Mori, koji. (2021) Competencies of occupational health professionals for disaster management based on their own experiences, Environmental and Occupational Health Practice, pp.1-10.
- 7) 吉川悦子・安部仁美・横川智子・久保達彦・立石清一郎・森晃爾 (2021) 「熊本地震で被災した事業場に所属する産業保健専門職の経験からとらえた災害時に必要な産業保健専門職のコンピテンシー」『産業衛生学雑誌』第 63 巻, 第 6 号, pp.91-303.